JELES-54 (2024)　　2024年3月2日

「内発的発展論」から見た外国語学習

―言語学習歴による多言語資源の活性・活用に着目して―

湯山トミ子（東京都立大学）

目　　次

はじめに

１．　ここでの内発的発展論

２．　外国語学習と自律的学習

３．　多言語学習の今と学習資源

４．　学習者に内在する多言語資源

５．　内在的多言語資源の活用と教育支援

おわりに

１．　ここでの内発的発展論

内発的発展論：地域開発論として生まれた　　地域経済論、国際開発論

1980年代注目され論議　発展

社会学　鶴見和子（1974～）　　思想の科学　近代化論

費孝通、宇野重昭との共同研究

中国小城鎮研究による転換

湯山（通訳、翻訳担当）として共同研究に９年間参加（成蹊大学アジア太平洋研究センタープロジェクト日中小城鎮研究会1985~1994 ）

先進・後進の区分による近代化論⇒模倣でない個別の多様性に立つ多系的発展へ

自律性、主体基盤の多様性による多様な発展の経路と現れとしての多様性

異質なものとの出会いによる発展　主体の創造性

発展のメルクマール（参考）

【近代化論】

・鶴見 （1974）：T. パーソンズに代表される近代 化論、「先進国＝内発的発展（endogenous development）、後発国＝外発的発展 （exogenous development）」という考え方から脱却し非西欧社会の立場から、また後発国お よび発展途上国の立場からの内発性を重視した 新たな社会変動のパラダイムの構想。

*鶴見・川田（1989）：「支配的な欧米の発展段階説的歴史観に対する批判から生まれた複数発展路線という問題提起」（鶴見・川田 p31）
全体論に対する個、中心に対する周辺、地域、他律的支配的発展に対する共生性、複数性などの要件

【多様性と創造性】

・鶴見（1980）：「内発的発展とは、目標において人類共通で あり、目標達成への経路と創出すべき社会のモ デルについては、多様性に富む社会変化の過程 である。共通および集団が、衣食住の基本的欲求を充足し人間 としての可能性を十全に発現できる条件をつく り出すことである。それは、現存の国内および 国際間の格差を生み出す構造を変革することを 意味する。 そこへ至る経路と、目標を実現する社会の姿 と、人々の暮らしの流儀とは、それぞれの地域の人々および集団が、固有の自然環境に適合し、 文化遺産（伝統）に基づいて、外来の知識・技 術・制度などを照合しつつ、自律的に創出する。地球的規模で内発的発展が進行すれば、それ は多系的発展となる。そして、先発後発を問わ ず、相互に手本交換がおこなわれることになる であろう」 （鶴見1980 pp193－194）。

創造性について「これまで結びつかな いと思われていたものを、結びつける新しい場 を発見することによって、異質なものを統合して、新しい価値、考え、行動の様式、人間関係 を創り出すこと」、内発 的発展、「人間生活のさまざまな側面におけ る創造的構造変化の過程」創造の過程について、科学・技術のほかにも、産業構造、統治機構、 入間関係の構造、生活様式、教育、宗教など様々 な側面について仔細に調べていく必要がある。

【内発的発展と主体性】

・鶴見（1994）：珠江モデルを外発的とみなす鶴見、内発的であるとする費（外 国の資本、技術、人材、設備が導入されても、 内発的な郷鎮企業が主体となって外国資本を 地域の住民のために役立てるなら内発的である との解釈 費991、大和田訳1993 pp263－276）。
内発的発展における担い手（主体）の問題 内発型と外発型 （外向型）の中間を設定。 主体性（イニシアチブ）がどこに あるのか？

・鶴見和子（1974）「社会変動のパラダイム」 鶴見和子・市井三郎編「思想の冒険」筑摩書房。
・鶴見和子（1980）「内発的発展論へ向けて」 川 田侃・三輪公忠編「現代国際関係論一新しい国際秩序を求めて』東京大学出版会。
・鶴見和子（1989）「内発的発展論の系譜」 「アジ アにおける内発的発展の多様な発現形態」 鶴見・ 川田侃編『内発的発展論』東京大学出版会。
・鶴見和子（1991）「内発的発展論の原型」 宇野重昭・朱通華編『農村地域の近代化と内発的発 展論一日中「小城鎮」共同研究』国際書院。
・鶴見和子（1994）「内発的発展論と模式論」 宇野重昭・鶴見和子編『内発的発展と外向的発展一現 代中国における交錯』東京大学出版会。
・鶴見和子（1996）『内発的発展論の展開』 筑摩書房。
・松本貴文（2000）「内発的発展論に関するノート（1）」 泉館智寛明星大学社会学研究紀要No.20 March2000 参照.。

【多様性と創造性の特徴】

③創造の過程を対象とする

④創造との関連で外部との関係性を重視する。

⑤アイデンティティを探究する方法であり、内発的 発展を通して人間の社会的・精神的自立が達成され、個性としてのアイデンティティが確認される。

⑩多様な価値体系や多様な発展を肯定する多元論で ある

（川勝平太（1999）：鶴見の内発的発展論の特徴12 点にみる創造性への着目）

・川勝平太「解説 内発的発展論の可能性」、鶴見和子『鶴見和子曼荼羅Ⅸ 環の巻』藤原書店　pp347-62 、1999.
・松本貴文「内発的発展論の再検討： 鶴見和子と宮本憲一の議論の比較」 下関市立大学論集　第61巻　第 2 号、 2017. 9.

２．　外国語学習と自律的学習

①多くの日本における教室外国語学習者の学習契機は制度によりもたらされてきた一律的教育

英語：義務教育　⇒　個別状況での拡充　　英語塾、課外活動、留学、交流事業、交流の契機
受験英語
大学教養課程での第一外国語（必修）

中国語：高校での選択外国語
大学教養課程初修外国語　一年選択必修　二年以上は自由選択、または制度上終了
自由意思による継続学習

やらなくて済む　あるいはやりたくてもやれない

外国語学習環境に親しんできた学習者の自発的学習度は高い
外国語学習、言語学習への関心、喜び、楽しみを語る傾向が見られる

②学習方法：ある程度の幅はあるものの基本枠の設定
　学習成果：到達目標の一律化

外国語学習は同一時期、同一内容で初めても習得度は一律にはなりえない
ある程度の基準、枠での評価、認知は可能だが、語学学習そのものは個人により多様

⇒個別の状況による多様な発展と発展の経路　　内発的発展論との接点

言語学習主体の多様性と学習形態、到達目標の多様性の再認識

3.　多言語学習の今と学習資源

【現行の多言語学習】

・ICTの発達、インターネットの普及、日常的な多言語環境と簡便な言語アプリ(音声，翻訳，学習など)

大量の生の多言語の音声と視覚情報、文字情報

大小様々の多彩な多言語学習教材と多言語接触の契機 、簡便で多様なコミュニケーション実践

・多彩な多言語メニューを備えた大規模多言語学習サイト⇒学習するときは、一つの言語を選択する

学習者と目標言語は一対一の縦割り型

【選択学習型大規模多言語学習システム】
TUFS（東京外大）、高度外国語教育独習コンテンツ（大阪大）20言語 、LiveMocha（37言語）、米国務省外交官養成コース内公開サイトFSI Language Courses（45言語）、Duolingo(28母語話者向け94言語） 等.

・現行の多言語学習システム⇒基本的にモノリンガル型

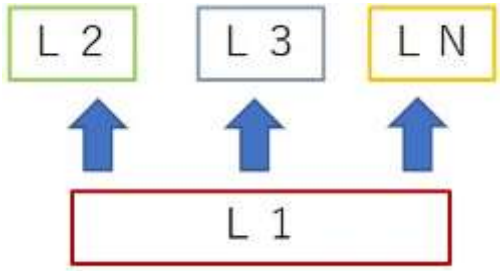
複数言語を同時に学習することはできない

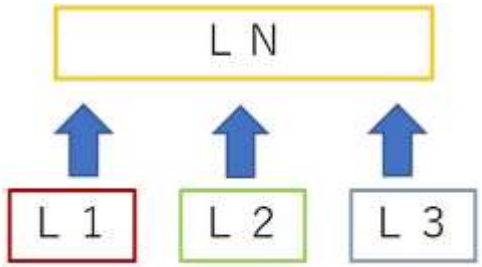
【モノリンガル型多言語学習】

・ 基本的に個別の単言語型学習の集積　　言語単位で構成される （Ｌ１、Ｌ２、Ｌ３、Ｌn)

学ばれる言語間に関係性はなく、学習活動、学習成果は言語ごとに分離、言語能力は個別言語の能力としてのみ認知

⇒　言語種により構成されるタコつぼ型の言語学習　　（言語を基盤とする⇒言語本位の学習）





・学習者にとっての言語学習：学習の積み重ねにより言語学習の体験を蓄積し、言語を学習する能力を育んでいる
（Ｌ１＋Ｌ２＋Ｌ３＋Ｌｎ）

個別の言語学習能力だけでなく、個別言語に還元できない言語能力を育んでいるが、
個別の言語能力を認知、評価する言語学習の下では顕現しない

【多言語学習としての英中学習形態】

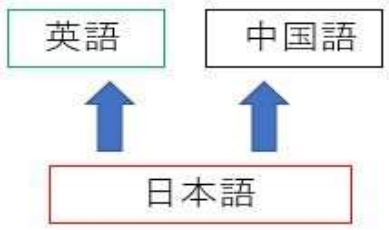
・初級修了段階の中国語学習者が中国語の学習を発展させ、英語学習もしようとすると

現行の多言語学習形態では 基本的に**個別の学習として異なる経路**で行わなければならない

便宜的に中国語で英語を学ぶ、英語で中国語を学ぶことはできても

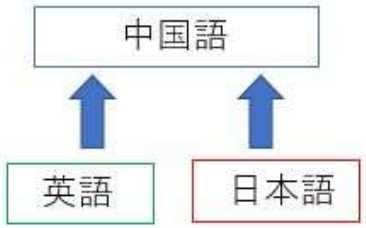
両言語の習得を目指す構造的なプログラムに基づいて系統的に学べるわけではない

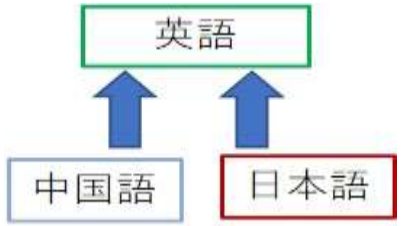
日本語を用いて英語、中国語を学ぶ



一言語で多言語を学ぶ

英語または日本語で中国語を学ぶ





多言語で一言語を学ぶ

複数言語を学んでも言語種により言語活動は個別に行われ、成果も個別化

4．学習者に内在する多言語資源

学習主体の多様性に対する一律化

言語単位の学習形態による個別化、学習目標、到達度の一律化

↓

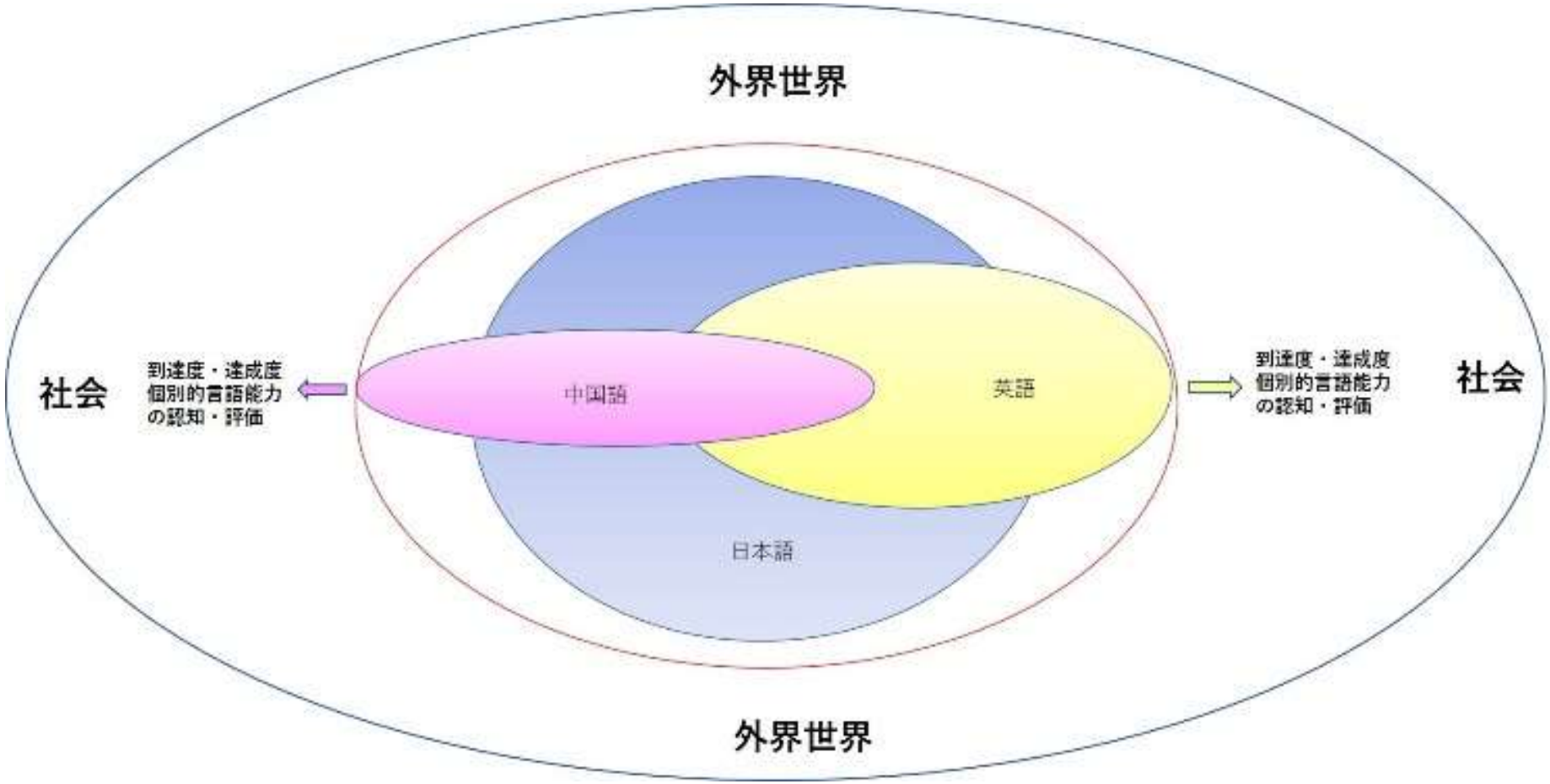
こうした外国語学習、多言語学習のもつ制約性、課題

↓

外国語学習者のもつ多様性、学習者が重ねてきた言語学習の多様性を活かし、

学習者自身を活動主体とする言語学習の創出を図れないだろうか？

【学習者に内在する多言語資源のイメージ図】



（「母語日本語＋既習外国語英語・初修外国語中国語」）

＊言語ごとに個別に蓄積される言語資源

【多言語資源と言語能力】

①言語学習による言語能力

個別的な言語能力（音声、文法、語彙、理解力、運用力など）として認知、評価

②言語学習により蓄積される学習の内在的な言語資源としての言語能力

言語学習歴（母語+外国語）を構成する各言語の個別性、言語間の相互影響性、
学習形態、学習環境、学習時間、学習者の資質、外界との接触体験，メタ言語意識など、

↳ **複数の要素が複合的に作用して形成**

ex　言語学習歴「母語日本語+既習英語+初修中国語」による統合的言語能力の特徴

言語の個別性（日中英三言語のそれぞれの特性）
言語間の相互影響性（日英、日中、日英中などの組み合わせにより作られる）
＋　学習、学習者の特徴

↓

タコつぼ的単言語学習の並列化では認知されにくい内在的、多層的、多様な実体

【内在的言語資源、言語能力への着目】

（１）言語ごとの到達度に集約されない学習者の統合的な言語能力の認知

◆CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠、Common European Framework of Reference for Languages）の言語能力観

母語とそれ以外の複数の言語を学ぶことを提唱する複言語主義（言語政策）推進のための産出言語の認知枠組み。

母語と他の言語との二分を基本枠組　⇒　言語能力は個別言語の寄せ集めではない全体で一つの統合性をもつもの

＊異文化間理解には文化間理解力と言語能力を想定してCEFRで参照を進める
（CARAP・FREPA）「言語と文化の多元的アプローチのための参照枠」がある。

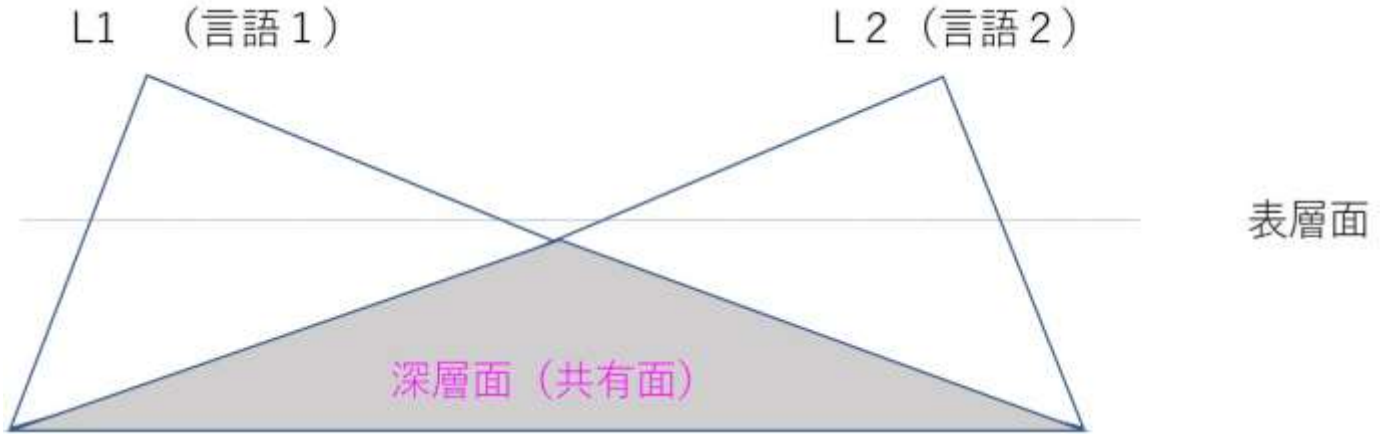
◆「ことばの市民性」(自己発信と他者理解により社会を形成する個人の言語活動．細川2012．細川、尾辻、マリオッティ2016)：CEFRの受容をめぐる論議を経て、日本から発信された言語能力観。

母語、第二言語、外国語等の言語区分を取り去り、個人のもつ言語能力の総体を重視しようとする言語能力観

（２）統合的な言語能力の認知と運用論

バイリンガル研究：70年代　単言語の分立とその切り替えによる運用説（分離基底言語能力論SUP）
：Separate Underlying Proficiency model

- **共通（共有）基底言語能力論（CUP：Common Underlying Proficiency model、 Cummins 1980）**
  個別言語の成立基盤に共有される統合的な言語能力
- **発達相互依存仮説（developmental interdependence hypothesis、 Cummins　1979）**
  ：言語間の連係性、類似性のない言語間の関係性（転移）



表層では二つの言語、深層では共有、表記法は二つ、読む書く考えるプロセスは一つ

Jim Cummins　1986　Bilingualism in Education　p 83を基に作成

先行する統合的な言語能力： CEFRの統合的言語能力論、Cumminsのバイリンガル論

言語間の関係性、影響性自体は明確化されない

動的マルチリンガリズムDMM（P. Herdina and U. Jessner 2002)

A Dynamic Model of Multilingualism: Perspectives of Change in Psycholinguistics
Multilingual Matters Ltd; (2002.3)

言語学習、言語能力を固定した言語枠でとらえず、学習者自身による動的生成による発展と見なす
概念規定できない動的なもの（動性）の認知

「言語」基盤（Chomsky UG論 1965）から「話者」基盤へのシフト 転換を図る主張 (大山万容2021)

本課題：外国語学習を個別言語の習得に完結させず、学習者のもつ言語学習資源の多様性を活かし、
固有性を基盤とする言語資源の活性、活用を目指す言語学習の実現

「言語本位から学習者本位へ」のパラダイムの転換など、ＤＭＭ論との共通性

【統合的言語能力の動的生成】

・ＤＭＭ論（2002）における統合的言語能力：**個別言語の影響性、相互作用により生成**される。個々の言語は全体を作るモジュールであり、全体を構成する**分離できない固有性をもつ要素**として認知　　Dynamic Model of Multilingualism

＊DMB論：学習者の統合的言語能力における「個別言語」の名称、存在概念そのものを否定する
言語種による区分(言語という分類、個別言語の存在）を認めない,言語を超越するトランスランゲージング、しかし個別言語の枠抜きには記述できない(矛盾の自己認知)
Dynamic Model of Bilingualism（García&Li 2014 ）、（大山万容　2019）
Translanguaging : language, bilingualism and education / Ofelia García and Li Wei Palgrave Pivot; 第2014版 (2013/11/29)

外国語学習者の言語能力：<u>「母語+外国語」を構成する言語種</u>の言語能力には還元できない統合的言語能力

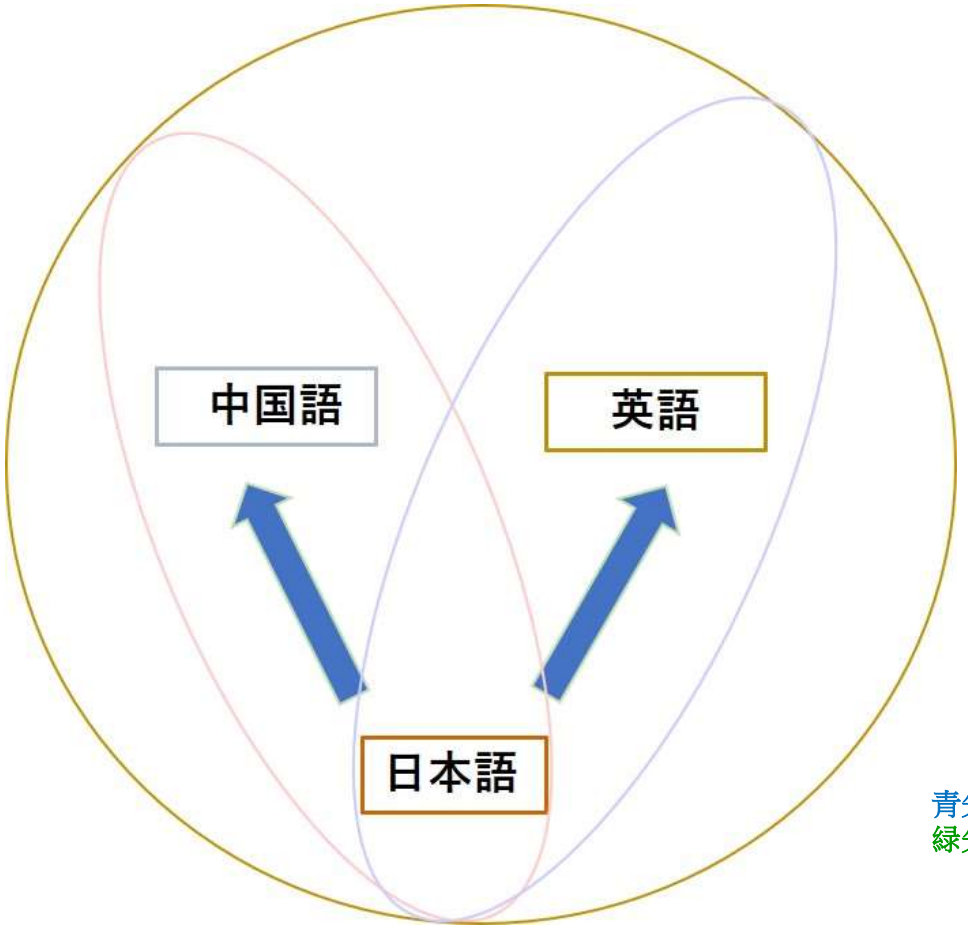
↳構成言語の個別性、言語間の関係性、相互影響性
学習形態、学習環境、学習時間、学習者の資質、外界との接触体験、メタ言語意識など
<u>言語の固有性と学習・学習者の固有性⇒複数の要素が複合的に作用して形成</u>
動的、可変的

＊日英中の影響性⇒「母語日+既習英+初修中」、「母語英+既習中+初修日」
「母語中+既習日+初修英」　同一の特徴が生成されるとは言い難い

＊学習者の固有性（学習履歴、パターン析出等が必要）

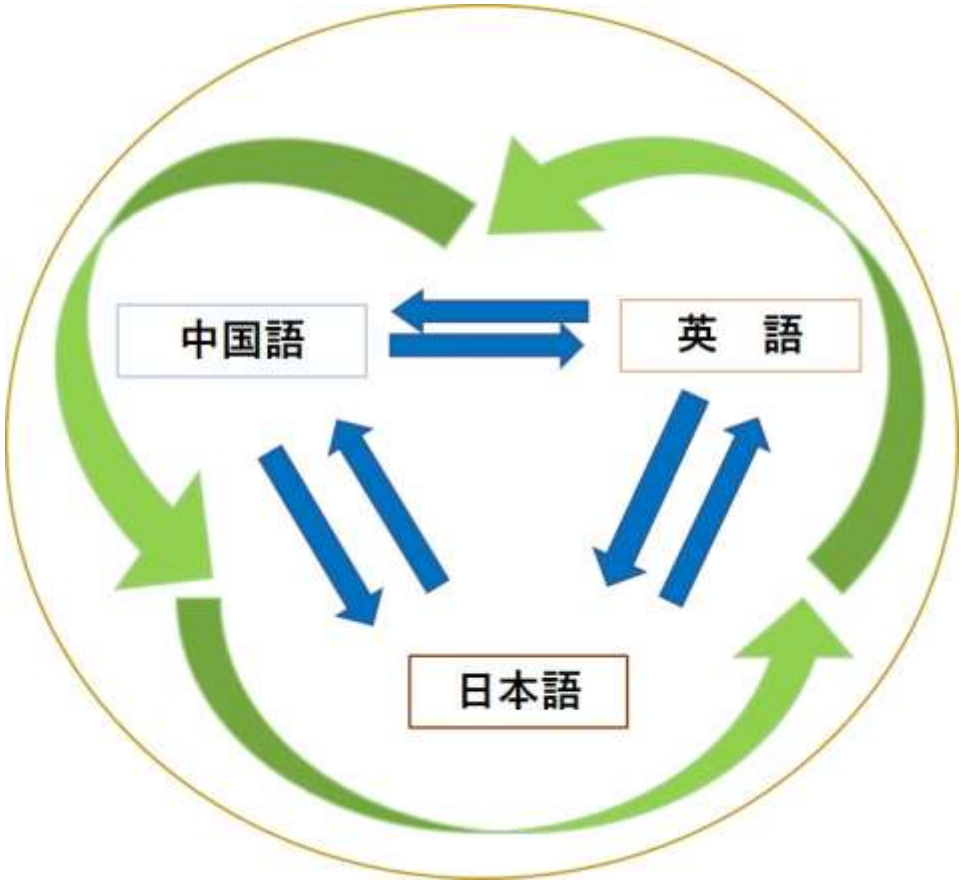
構成言語の個別性、言語間の関係性、影響性の分析⇒生成される言語能力の**基本的特徴の初歩的認知基盤**は得られる

【多言語資源の活性、活用】



青矢印　学習活動
緑矢印　言語能力(右図)

実現目標イメージ図



モノリンガル型学習
潜在化し可視化されない言語資源、言語能力(無表示)

学習者のもつ言語資源の連携による言語学習（ランゲージング）、動的に運用、活用

５．　内在的多言語資源の活用と教育支援

【学習者自身による多言語資源の活用と教育支援】

学習者の内在的な多言語資源

構成言語の個別性、言語間の関係性、相互影響性

学習形態、学習環境、学習時間、学習者の資質、外界との接触体験、メタ言語意識など、

言語の固有性と学習・学習者の固有性⇒複数の要素が複合的に作用して形成

動的、可変的

多様性に根付く多様な学習の実現、学習の在り方、到達目標の個別化

学習者自身のみが主体となって実現できる、学習者自身のみが実践者となれる

教育ができることは？

【多言語資源の活用と教育の役割】

・言語の種類、制度的特徴、個人の学習特質（状況、学習者の資質、特徴、個性等）を含む多様な統合的言語能力の生成、促進

↓

生成の主体は学習者自身

専門的知識は言語学の規範からだけでは生み出しえない。
学習者における統合的言語応力の動的生成、言語間の影響性、関係性とのコラボが不可欠。

→ **教育は専門的知識を有するものとして支援できるにとどまる。**

↓

学習者の動的生成への目覚め、自律的生成意欲を喚起する刺激などをいかに提供できるかが重要

学習者の意識状況もまた多様　どう促進できる契機、影響性を生み出して行くか？

【多言語資源の活用、統合的言語能力の動的生成論による教育課題】

学習者の多様性：中国語⇒得意、そこそこ、苦手等々
英語⇒やりたいけど、忘れてる！　　英語苦手等々

日本語、中国語ではこうだけど、英語ではどうなってるの？
英語のルールってどうだっけ？　　忘れちゃってる！

⇒ 多様な学習者の統合的言語能力への対応は、個別性が高く、緻密な適正支援の制度的実現は困難

【重要】：言語間の関係性、影響性は、**言語学習の発展に正負の影響性をもつ**
⇒言語の固有性、固有性による学習法の正負の影響

学習歴は目標言語の特徴、理想的な言語能力を保証しない、習ったからといってその言語の能力が得られているとはいえない⇒積み残し(未習得・未消化）課題

「言語学習歴」の言語種の固有性、学習形態、学習法を明確化⇒学習対象に反映する

先行研究(DMM 論）：統合的言語能力は学習者のすでにもっている言語能力の活性化により発展する　Dynamic Model of Multilingualism　p161　2002

【統合的言語能力の動的生成ランゲージングに着目した多言語資源の活用】

生成の主体(学習者)

自律的生成

限定性・可能性

教育の役割

内なる生成への支援

限定性・可能性

多様な学習体験により生成される言語能力
（内在性・多層性・多様性）

具体的な能力生成の条件、要素は学習者により異なる多様　⇒いわゆる「個人差」になってしまう。

基本パターンは言語種類の学び方のパターン化によりある程度の把握が可能

学習者の多様性への制度的対応は困難

学習の場、契機の創出

専門知識をもつ教員の支援

学習対象の提供

学習者が自らに内在する言語能力を認知、活用するための内的出会いの支援、自律的生成の促進

おわりに

目標において共通、目標達成への経路と創出すべきモデルは多様な変化の過程

異質なものとの出会いによる、新たな価値、多様な考え、活動の創出

母語日本語の言語学習体験、言語資源と外国語学習の出会い

学習者自身による言語活動、学習者を主体とする言語学習、外国語学習の創出

言語の専門家、学習の専門家としての支援

【主要参考文献】

【内発的発展論】

1. 鶴見和子①「社会変動のパラダイム」鶴見和子・市井三郎編「思想の冒険」筑摩書房, 1974.

   ②「内発的発展論へ向けて」川田侃・三輪公忠編「現代国際関係論一新しい国際秩序を求めて』東京大学出版会, 1980.

   ③「内発的発展論の系譜」アジ アにおける内発的発展の多様な発現形態」鶴見和子・ 川田侃編『内発的発展論』東京大学出版会, 1989.

   ④「内発的発展論の原型」宇野重昭・朱通華編『農村地域の近代化と内発的発 展論一日中「小城鎮」共同研究』国際書院, 1991.

   ⑤「内発的発展論と模式論」宇野重昭・鶴見和子編『内発的発展と外向的発展一現 代中国における交錯』東京大学出版会, 1994.

   ⑥『内発的発展論の展開』筑摩書房, 1996

2. 川勝平太「解説　内発的発展論の可能性」鶴見和子『鶴見和子曼荼羅IX　環の巻』藤原書店, pp347-62, 1999.

3. 松本貴文 ①「内発的発展論の再検討： 鶴見和子と宮本憲一の議論の比較から 」下関市立大学論集, 第61巻, 第 2 号, 2017. 9

   ②「内発的発展論に関するノート（1）」泉館智寛明星大学社会学研究紀要, No.20, March 2000.

【統合的言語能力】

1. Conseil de l'Europe , 吉島茂・大橋理枝（訳）,『外国語教育〈2〉外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』, 朝日出版社, 2004. *Council of Europe(2001) Common European Framework of Reference for Language

2. ①細川英雄・尾辻恵美・マルチェッラ・マリオッティ編『市民形成とことばの教育—母語・第二言語・外国語を越えて』, くろしお出版, 2016.

   ② 細川英雄『ことばの市民になる—言語文教育学の思想と実践』ココ出版社, 2012 .

3. ① Jim Cummins ・ Merrill Swain , Bilingualism in Education: Aspects of theory, research and practice (Applied Linguistics and Language Study)
   :Routledge, 2016

   ② Jim Cummins・ Nancy. H. Hornberger , Bilingual Education and Bilingualism,29 : Anintroductory reader to the writings of Jim Cummins, Colin Baker, ed. Clevedon , UK , multilingual Matters , 2001.

4. Philip Herdina and Ulrike Jessner ,A Dynamic Model of Multilingualism: Perspectives of Change in Psycholinguistics (Multilingual Matters, 121)
   Multilingual Matters Ltd; Illustrated版, 2002.

5. Ofelia García and Li Wei ; Translanguaging : language, bilingualism and education , 第2014版, Palgrave Pivot , 2013.

6. 大山万容,「 トランスランゲージングと複言語教育-言語能力観から検討する」MHB2019年度研究大会, 口頭発表資料PDF（ppt）, 2019. 8.7.

【報告者本主題関連発表　2023】

1. **湯山トミ子　「統合的言語能力の動的生成、ランゲージング：自律的言語学習の促進を目指して」日本英語教育学会・日本教育言語学会第53回年次研究集会 2023 年3月5日 「複数言語連携学習：進む学習者！出遅れる教材！どうする教育？」第一報告　口頭発表。**

2. **湯山トミ子「自律的ランゲージングと教育の課題」（日本英語教育学会・日本教育言語学会第53回年次研究集会 2023 年3月5日 「複数言語連携学習：進む学習者！出遅れる教材！どうする教育？」第三報告　口頭発表。**